

## 写真記憶能力向上を狙う乳幼児教育の潜在的消費者問題

小町由香里 ADAGIO 研究所

e-mail: yukari@y-adagio.com

### 1. はじめに

乳幼児期に行う早期教育は、①英語や算数など学校で行うことを早めに始めるもの、②音楽やスポーツを早めに始めるもの、この二つのタイプに大別される<sup>1</sup>。①のタイプの中でも特に右脳左脳論を根拠にした早期教育に対してはかねてより賛否両論が存在する。

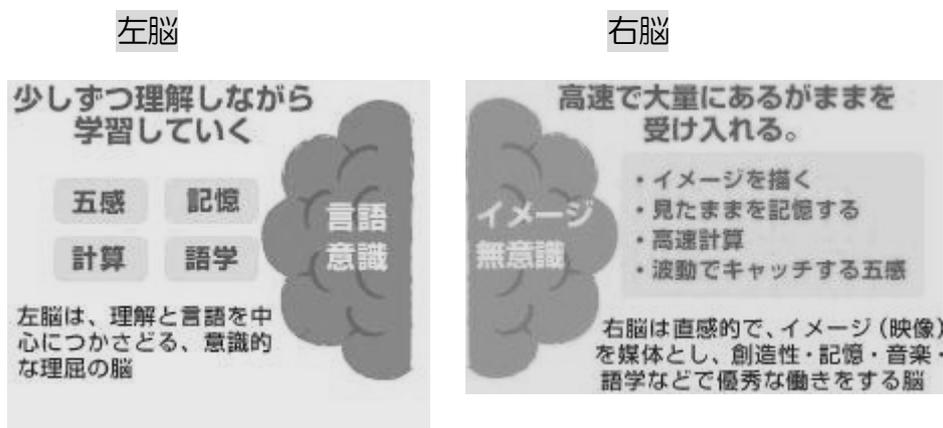
今回はまず一昨年（2008年）一般週刊誌に実名を明記した批判記事が出た七田式早期教育を例にとり、七田式に対する批判内容を概観する。次に、七田式の主要な根拠の一つである写真記憶力（以降、心理学用語に従って直観像）向上について、過去の研究成果との比較を試みる。最後に脳科学および磁気共鳴画像(MRI)等の発達をもたらした脳科学ブームや神経神話と消費者問題との関連について考察する。

### 2. 七田式早期教育とそれに対する批判

#### 2.1 七田式早期教育とは

七田式教育法とは七田眞(1929-2009)が提唱した教育法のことである。そのコンセプトを図1, 図2に示す。七田の著書『七田式右脳全開教育』によれば、七田の経歴は次のとおりである。

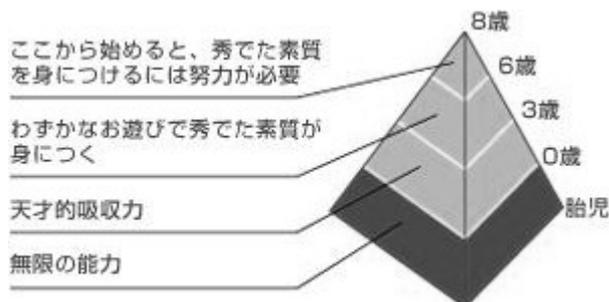
七田は1958年島根県江津市の民家の2階に「教育研究所」（という名前の学習塾）を開いた。カール・ピッテの著書『英才教育の理論と実際』、なかでも「才能遮滅の法則理論」に影響を受け、自分の子どもたちに早期教育を行った。その後、地元紙に0歳教育についての記事を連載（1970年12月～1971年10月）、これを契機に早期教育に関する著作・研究活動を展開するようになった。1976年には「もじのカード遊び」という教材を出したり、週刊ポストで七田式が紹介されたりもするようになった。1983年東京事務所オープン。1987年10月「七田児童教育研究所」の実権を息子に譲り会長となり、同年11月、別資本の七田チャイルドアカデミーが発足。その後も広く全国展開を続け、現在では海外にも教室が広がっている。近年は胎教や大人向けの右脳開発にも乗り出している。



右脳はイメージで考慮し、ひと目で見たものの全体を記憶する力を持っており、豊かな想像性を発揮します。左脳は言語で思考し分析や論理性をつかさどります。この左右の脳がバランスよく働いてこそ、能力も活きてくるのです。

図1 右脳・左脳についての説明 (注)七田チャイルドアカデミーHP より

<sup>1</sup> 無藤, 22 頁



右脳の働きには「才能逡減」の法則というものがあります。子どもの脳には驚異の可能性と吸収力があります。その能力は小さい時期ほど大きいというのがこの法則。子どもの才能の伸びが大きい時期に、幅広く取り組みをしていきましょう。

図2 才能逡減の法則についての説明 (注)七田チャイルドアカデミーHP より

## 2.2 七田式教育への疑問

### ① と学会での取り上げ方

と学会<sup>2</sup>の著書においても七田式教育が複数回取り上げられている。その内容を一部抜粋する。

『トンデモ本の逆襲』洋泉社 1996年 123-126頁, 藤倉珊

七田眞著『赤ちゃんは算数の天才!』KKベストセラーズ 1994年

これは一見、幼児教育の本のようで、実際、幼児教育の本なのだが、油断してはならない。普通、オカルトなどとは無縁と思える分野でも、トンデモない本はいろいろあるという例であろう。[……] 著者によると、赤ん坊はみな算数の天才であり、コンピュータなみの能力を持っているというのだ。[……] しかも、幼児の能力は暗算だけではない。右脳を活性化させるとESP能力が目覚めるというのだ。[……] 七田式の理論面は、要するに「右脳を活性化すると天才になる」ということに尽きるようである。そのためにアインシュタインやエジソン、ファラデーといった例を示し、さらには右脳のイメージ力が優れていたと三島由紀夫や宮沢賢治、さらには栗本薫にいたるまで、天才として並べ立てていて、右脳の活性化の例としているが、よく考えてみると、これらの天才たちは別に七田式の教育を受けたわけではないし、右脳が活性化していたというのも脳を診断したはずはないのだから仮説にすぎない。[……] しかし、七田先生のもと、二万人もの赤ん坊が「天才教育」を受けていることは事実であろう。もし七田氏の主張が本当なら、二万人の天才児、それに加えて超能力者が続々と登場していきなり、まさに驚異である。また、もし七田氏の主張が誤りならば、二万人もの赤ん坊に、とんでもない仕打ちをしていることになり、やはり驚異である。

『トンデモ本 女の世界(下)』扶桑社 2004年 97-105頁, 山田高明

七田眞著『赤ちゃんは天才!』KKベストセラーズ 1997年

七田氏によると、そもそも赤ちゃんは無限の能力を秘めているという。もっともこの表現だけからすると、単に幼児や子供の可能性を論じたよくある比喩のように聞こえるが、この本に掲載されている事例を見ると、とてもではないがそんなレベルの話でないことがわかる。ほとんど四次元や超能力の世界に突入しているのだ。[……] なんでも七田チャイルドアカデミー教室の子供たちは、このようにイメージによって対象物の中に入り、石の持つ情報を受け取ったり(例えばかつては山の岩石の一部だったのが、発破によって吹き飛ばされたり、とか)、庭の朝顔と対話したりできるのだという。[……] そして氏の理論の根幹を成すのが「右脳教育」と「波動理論」である。という、『脳内革命』とか「船井本」

<sup>2</sup> 1992年秋結成、トンデモない本を研究するグループ。1995年『トンデモ本の世界』がベストセラーになり、「トンデモ」という言葉も一般社会に浸透した。[と学会出版物 参考]

などを思い出す方もいらっしゃるかもしれないが、はっきりいって七田氏のほうが、ぶっ飛んでいる。[……] さらに、「右脳教育法」をやると、障害児も健常児に変わるのだという。氏の胎教コースでは、なんとお母さんがお腹の赤ちゃんに「体の悪いところは自分で全部治して、健康で生まれてきてね」と語りかけるというものがあり、実際、このコースを受けた母親からは障害をもった子が生まれたことがないのだそうだ。いったいこの人たちは人間の遺伝子というものを、なんと心得ているのだろうか？

## ② インターネット内での議論

インターネット内においても各種掲示板やブログ等において七田式に関する議論がみられる。たとえば、菊池誠の物理ページ内 Weblog 「七田式幼児教育は、やっぱりまずいので<sup>3</sup>」においては、早期教育の是非をはじめとして、教育効果をはかることの難しさ、専門家の存在意義、教育の専門家は誰なのか、子育て中の母親の置かれた状況、障害児教育、消費者問題としての捉え方など、多岐多様にわたる問題が指摘され、真摯な議論が展開されている。

## ③ 専門家からの指摘

教育学や小児医療、臨床心理などの専門家からも七田式教育に対する批判および懐疑論は存在する。業者名を明記しないもの、早期教育論者の唱える臨界期等についての間違いを指摘しつつも、結論的にはアンビバレントなものなども存在する。一方、週刊誌等で批判記事が出る以前から七田の実名を挙げてかなり思い切った反論をしていた専門家たちもいる。

たとえば、保坂展人（当時、教育ジャーナリスト）は1996年発行の著書『ちょっと待って早期教育』の中で、七田眞と誌上ディベートを行った経験を書いている。七田眞から「あなたは幼児教育を何年研究していますか。[……] これ以上親たちを迷わせないで下さい」との質問をぶつけられたことなど生々しい議論の様子が窺える<sup>4</sup>。教育の専門家は誰なのかという問題も改めて考えさせられる記述である。

大学教授をはじめとする学者、研究者に目を移せば、たとえば古賀野卓（教育経営学、幼児教育学<sup>5</sup>）は、七田が著書の中で批判論者を評して「直感の働かない左脳人間<sup>6</sup>」などと発言したことに対して、「この詭弁的な発言が、意図的なものなのか、そうでないものなのかはわからない。[……] 七田は、フラッシュカード方式による学習を価値前提におきながら、『体験知』をめぐる議論に参加することで、論点そのものをずらす<sup>7</sup>」と2003年発表の論文の中で強く反発している。また、七田のプログラムにはあそびの要素があると言いかねないことに対しても、「幼児期の『あそび』は、そういう一つの事業体がコントロールできることから、遠く離れたところに存在するのだから<sup>8</sup>」と主張している。

加藤繁美（幼児教育<sup>9</sup>）も1995年発行の著書の中で、井深大、鈴木メソッド、石井式漢字教育、ドーマン方式に続いて七田式をあげ、「皆同様に、対象とする年齢をどんどん下方修正しながら早期教育の必要性を説き、現在に至っているのです。[……] 巨大資本に支えられた早期教育論の展開と、その受け皿としての消費社会の発展は、日本の早期教育と幼児教育の姿を大きく変えることになっていくのです<sup>10</sup>」と述べ、現代日本の早期教育とその産業化について論じている。週刊文春の記事（当日配布資料）にコメントしている汐見

<sup>3</sup> 菊池誠の物理ページ内 Weblog 「七田式幼児教育は、やっぱりまずいので」

<sup>4</sup> 保坂, 105 頁

<sup>5</sup> 研究分野については独立行政法人 科学技術振興機構の Web ページ掲載の研究者データを転記した。

<sup>6</sup> 七田, 96 頁

<sup>7</sup> 古賀野, 23 頁

<sup>8</sup> 同上, 29 頁

<sup>9</sup> 研究分野については独立行政法人 科学技術振興機構の Web ページ掲載の研究者データを転記した。

<sup>10</sup> 加藤, 31 頁

稔幸東京大学名誉教授も1993年発行の著書『このままでいいのか超早期教育』の中で七田式を紹介している。

しかしながら、①超早期教育産業に対する疑念、②親の育児疲労や社会的環境に関する考察については強固な主張が見受けられる専門家であっても、早期教育が子どもの発達に与える影響に話が及ぶと、人によって幾分齟齬が悪くなることは否めない。

もちろん、私の提出した問題はすべて予測で、しかも典型化しているわけですので、早期教育、超早期教育をすると必ずそうなる、というようなことを言っているのではありません。その点はくれぐれも誤解のないようにお願いします。早期教育に対して頭から批判的な人が、早期教育をすると子どもはかくかくの問題をかかえるようになると汐見が言った、などと伝えるかもしれませんが、そのように言われるのはぼくの本意ではありません。ぼくはあくまでも、人類がまだ十分経験したことのない教育方法を導入するときは、その可能性や問題点について慎重に吟味してからにしてほしいと願って、その立場から検討課題を提起しているわけです。(汐見, 1993年, 103頁)

「幼児教育は心理学から大脳生理学へ<sup>11</sup>」「早期教育は、医学・神経生理学を基礎学とするのだという方向に、シフトしていつている<sup>12</sup>」とすれば、これも致し方ないことである。学者、研究者の立場からすれば、専門外のことにコメントすることはできない。また、証明もされていないこと、根拠もないことをあたかも定説であるかのように公言するわけにはいくまい。

つけ加えると、トンデモ本やブログ掲示板で指摘されるような波動や超能力育成に関することに触れている学者は極めて少ない。

### 3. 直観像

七田式の主要な根拠の一つである直観像の能力向上について、過去の学術的研究成果との比較を試みたい。

「直観像とは過去の経験が単に漠然と想い出されるのではなく、残像のように感覚的に明瞭に再現せられ、それが眼前の一定の位置に文字通り見える現象である<sup>13</sup>」。一般的には写真記憶などと称されるが、心理学では直観像 (eidetic imagery) と呼ぶ。古代よりこうした能力を持っている人が存在することは知られていたが、20世紀初頭ウィーンの医師ウルバンチッチュが初めて組織的実験的に観察研究し、その後1920年代にはドイツのイェンシュらが熱心に研究した<sup>14</sup>。日本では大脇義一の研究成果が知られている。

初期の研究において直観像は子どもに普通に見られる現象(約半数に見られる)であるものの、思春期をすぎると直観像素質者の割合は急降下し、成人の素質者は極めて稀とされていた。しかし、1960年代のハーバーの研究では、500人以上の子どもから約20人しか直観像素質者(保有者)の候補者を見つけれず、過去の調査方法への疑問も残る結果となった<sup>15</sup>。その後、わが国の研究者からも検査方法修正の提案がなされたり<sup>16</sup>、その他研究成果も提出されているが<sup>17</sup>、心理学分野における中心的な研究テーマであった20世紀初期と比較した場合、心理学分野において直観像研究が盛んであるとは言い難い現状がある。

心理学的に直観像の存在は認められている。また、直観像素質者も世の中に存在すると考えられる<sup>18</sup>。しかしながら、まだまだ不明な点が多くあり、今後の調査研究を待つほかない。後天的に直観像を獲得するこ

<sup>11</sup> 汐見, 1993, 40頁

<sup>12</sup> 同上, 52頁

<sup>13</sup> 大脇, 1頁 ※原文は旧字体, 旧仮名遣いのため, 新字体に書き改め一部読点を加えた。

<sup>14</sup> 上掲書, 序説および第一篇 参考

<sup>15</sup> 吉村, 14-16頁

<sup>16</sup> 鬼沢・衛藤・松岡

<sup>17</sup> 畠山 1978, 薦田・増山 2000 および 2001, 原 2007 など

<sup>18</sup> 朝日新聞 1999年10月17日の朝刊において、神戸連続児童殺傷事件の犯人とされた少年が直観像素質を持っていることが精神鑑定書で指摘された旨の報道がなされた。また、少年の父母の手記にも直観像素質に触れた箇所がある。

とは可能かについて、大脇は1949年発行の著書の中で次のように述べている。「弱い直観像素質しか持たない児童が、練習により、明瞭な、充実した、高度の直観像を喚起できるようになるかどうかということである。これに就いては個々の具体的な可能の例は挙げられているが、未だ組織的な実験的観察は行われていない<sup>19</sup>」。その後の研究においてもこの疑問が解決しているわけではない。

#### 4. 脳科学の成果と拡大解釈

本年(2010年)1月日本神経科学学会は、科学的根拠のない「神経神話」と呼ばれる疑似脳科学が独り歩きしている現状に警鐘を鳴らす声明を発表し、マスコミ報道等でも話題になった。声明は脳科学研究の成果が脳ブームに伴って拡大解釈されて広がっていることなどを懸念し、脳活動の測定方法の安全性や測定でわかることの限界を知り、検証を受けた論文などを発信するように求めるものである<sup>20</sup>。また、経済協力開発機構(OECD)は、神経神話には「3歳までが学習を最も受け入れやすい」「右脳左脳人間」「脳は全体の1割しか使っていない」などがあると報告している<sup>21</sup>。

海外においてもこうした問題への指摘はかねてより存在した。たとえば脳の左右に関する革新的研究者であったアメリカのロバート・オーンスタインは次のように書いている。「脳の左右に関する研究をやめたのは、自分のやっていることが新たな狂気を作りだしているように思えたからだ<sup>22</sup>」。また、右脳開発などの商品についても、「こんなもろもろの商品についてたずねられると、『ゴッドファーザー』で老いたドン・コルレオーネが手下に問いかけた『なぜ、何もかもわれわれの手から離れてしまったのだ?』という言葉を思い出す。みんな良かれと思ってやってきたのに、なぜ、確かな根拠や科学的な理論からかけ離れたところに行ってしまったのか?」<sup>23</sup>と嘆く。

脳科学情報の受け手側のリテラシーを求める声もある。たとえば三田評論2009年7月号「発展する脳科学研究とその課題」には次の5名による座談会記事がある。

- 福山秀直(京都大学大学院医学研究科付属高次脳機能総合研究センター教授, センター長)
- 河野哲也(立教大学文学部教授, 専門は心の哲学・現象学・倫理学)
- 前野隆司(慶應義塾大学大学院システム・デザインマネジメント研究科教授, 専門はロボティクス・科学技術論)
- 牛場潤一(慶應義塾大学理工学部生命情報学科専任講師, 専門は脳科学, リハビリテーション工学)
- 渡辺茂(慶應義塾大学文学部教授, 専門は生物心理学)

座談会の終了直前の3発言を抜粋する。

河野: 哲学の立場から言うと、一般の人のリテラシーを高めるという点が脳科学にとっていちばんいいのではないかと思います。つまり、人々の過剰な期待に応えようなどと大上段に構えた研究者が出てくるとまずいことになるわけです。科学というものは少しずつしか進展しないもの、飛躍したことはできないものだということを理解し、脳科学書を読む側もいったいそれは何を意味しているのだろうか、常に批判的な気持ちをもって利用するリテラシーが一般的な教養として必要なのではないかと。それも中等教育から、何らかの形で知ってもらえる教育をすることが必要だと思うのです。

福山: 同感ですね。脳に関する一般向けの本が出版されている、その最大の理由は、高校までの教育に脳に関するものが

<sup>19</sup> 大脇, 99頁 ※※原文は旧字体, 旧仮名遣いのため, 新字体に書き改めた。

<sup>20</sup> 朝日新聞2010年1月8日, 読売新聞2010年1月23日

<sup>21</sup> 同上

<sup>22</sup> ロバート・オーンスタイン, 11頁

<sup>23</sup> 同上, 96頁

ないことです。だから、脳についてほとんど何も知らぬまま大人になって、初めてそういう本を読むことになり、それが必然的にわかりやすい本が売れることにつながるのです。

渡辺：そうですね。初等・中等教育でもう少し脳科学を教え、リテラシーを高めることが必要だというあたりを結論にして、今日の座談会は終わりということにしたいと思います。ありがとうございました。

初等・中等教育での脳科学教育を実施するにあたっては解決すべき課題が多いと考えられる。たとえば福山は前述の対談の中で次のようにも語っている。教科書一つとってもみても、問題山積であることがわかる。

僕もたまに神経内科の教科書を書くんですが、大体難しすぎると言われるんです。でも、神経内科に関わる病気のこととか神経のことを単純に書くと漫画になっちゃうんですよ。[……] つまり一般書として売られているような脳に関する本は、素人には難解だと思われるような話はカットしているわけなんです。それに書かれていない前提があって結論を導き出しているようなところがあるのだけど、結論だけが書かれた本を読んでいる読者もいるので、そこらへんがまた非常に難しいところなんです。(『三田評論』2009年7月号, 22頁)

## 5. まとめ

これまでの議論の構図を簡単に示すと図3になる。

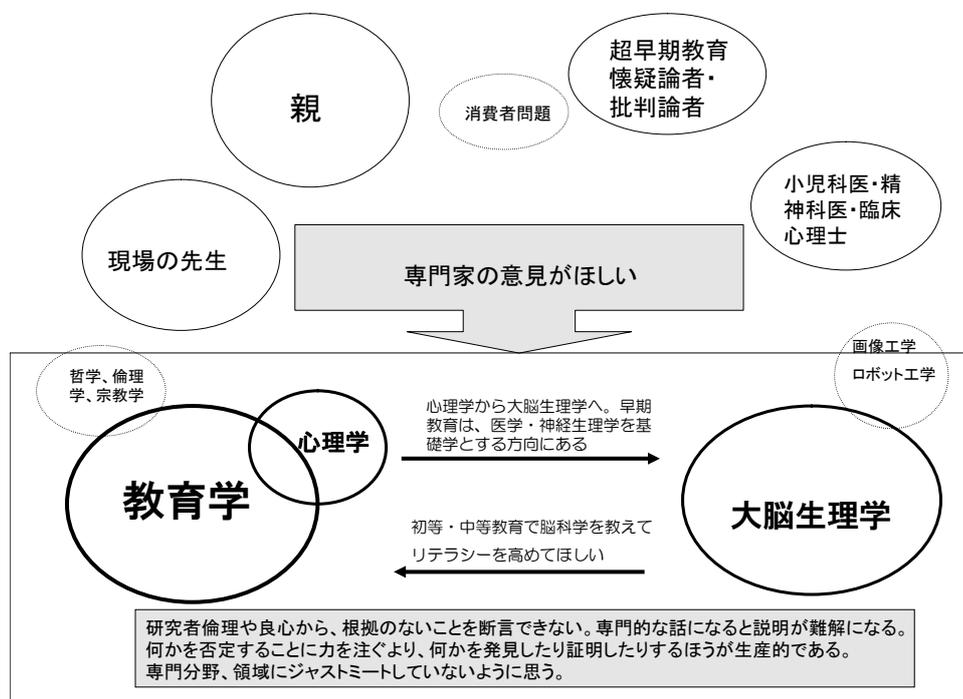


図3 早期教育に対する批判の根拠をどこに求めるか

脳科学および磁気共鳴画像(MRI)等の発達をもたらした脳科学ブームや神経神話は日本社会に浸透している。脳に関する研究は教育関連商品に直結しやすく、研究成果を拡大解釈した商品群を生み出す。

こうした状況の中、何が正しいのか、業者の言うことをどこまで信じればいいのか、「専門家の意見がほしい」という素人の要望は当然のことである。しかし、専門家であればあるほど、根拠もなく断言できない、わからないことについて発言はできないといった研究者倫理が重くのしかかる。学問分野の専門分化の進展

も相まって専門外のことへの発言は控える傾向がある。この点については大脳生理学者も心理学者も教育学者も同様であろう。

消費者問題の観点で考えてみる。教育効果の測定は難しいといわれる。何らかの訓練を行い、何らかの改善が見られたとしても、一体どこまでがその訓練の効果なのか、他の要素要因が入り込んだ可能性を否定できないことが多々あるからである。加えて、乳幼児（時には胎児）を対象とした訓練の効果を確認するためには、長期にわたる追跡調査が必要となり検証は困難を極める。したがって、「一種の食い逃げ戦略にたった商法 [……] 結果が出るのがずっと先という乳幼児が対象なのでいくらでもいいかげんなことがやれてしまう<sup>24</sup>」との指摘が当たっているケースもあるかもしれない。しかし、現実問題として、消費者（この場合は主に親）が納得してお金を払っている場合、「効果が全くない」もしくは「有害である」とする何らかの根拠がなければ、消費者問題として教育内容に踏み込むことは不可能に近い。

今回は「専門家とは何なのだろうか」ということも改めて考えさせられた。筆者は以前からプロフェッショナルとエキスパートとスペシャリストの差異について考え続けているのだが、今回の件もこの3つをひとつくりに「専門家」としていることに原因の一端があるのではないか。さらにいえば、素人は本当に何もいえないのだろうか。たとえばインターネットの中には「極上の素人」とでも呼ぶべき人たちが存在する。その人たちをもっと活かすことはできないのだろうか。

脳科学ブームや神経神話を背景にした商品群は、研究者倫理に忠実であるがゆえに口ごもりがちな専門家の隙間をくぐりぬけて生き続けてきたといえる。今後も非科学的な教育関連商品賀次々登場する可能性が高い。脳科学研究の成果を発信する側（学者、研究者）と受け手側双方の努力が不可欠であることはいうまでもない。加えて、各分野の専門家、実務家が手を携え、諸学問、諸領域横断的な取り組みを実行できる仕組みを構築することも必要であると考えられる。

## 文献

- 有路憲一 「早期教育の落とし穴 ―認知神経科学的見地より―」『信州大学人文社会学研究』2, 2-17 頁, 2008 年
- 大脇義一 『直観像の心理』培風館, 1949 年
- 鬼沢貞・衛藤順子・松岡和生 「像の特徴に応じた直観像検出法」Artes Liberales32, 105-119 頁, 1983 年
- 加藤繁美 『早期教育が育てる力 奪うもの』ひとなる書房, 1995 年
- 菊池聡・谷口高士・宮元博章編著 『不思議現象 なぜ信じるのか こころの科学入門』再版, 北大路書房, 2002 年
- げ・ん・き編集部編 『読み聞かせでのびる子ども 早期教育の見直し』エイデル研究所, 1993 年
- 古賀野卓 「『教育』の裏にある『ビジネス』 ―早期教育推進論者たちの巧みな経営戦略―」『筑紫女学園短期大学紀要』38, 15-33 頁, 2003 年
- 椎名玲・吉中由紀 「早期教育が子供の脳を破壊する」『週刊文春』50(36), 41-43 頁, 2008 年
- 汐見稔幸 『このままでいいのか超早期教育』大月書店, 1993 年
- 汐見稔幸 『幼児教育産業と子育て』岩波書店, 1996 年
- 七田眞 『七田式右脳全開教育』文芸社, 2002 年
- 「少年A」の父母 『「少年A」この子を生んで』文芸春秋<文庫>, 2001 年
- 高良聖編著 『警告! 早期教育が危ない 臨床現場からの報告』日本評論社, 1996 年
- 蔦田久美・増山英太郎 「デザイン活動における直観像の機能に関する基礎的研究」人間工学 36(6), 311-318 頁, 2000 年
- 蔦田久美・増山英太郎 「デザイン活動における直観像の機能に関する基礎的研究・第2報 ―絵画評価における直観像

<sup>24</sup> 菊池誠の物理ページ内 Weblog 「七田式幼児教育は、やっぱりまずいので」における発言（2007 年 7 月 12 日）

- 素質の有無による影響—」人間工学37(5), 246-251頁, 2001年
- と学会 『トンデモ本の逆襲』洋泉社, 1996年
- と学会 『トンデモ本 女の世界(下)』扶桑社<文庫>, 2004年
- 島山孝男 「直観像形成における予期の役割」山形大学紀要.人文科学9(1), 1-33頁, 1978年
- 原幸一 「直観像(eidetic imagery)に関する研究 —乳幼児健忘との関係—」三重短期大学紀要55, 27-29頁, 2007年
- 保坂展人 『ちょっと待って早期教育』学陽書房, 1996年
- 無藤隆 「早期教育と英才教育の違い」『教育と医学』54(10), 21-27頁, 2006年
- ロバート・オーンスタイン著 藤井留美訳 『右脳は天才? それとも野獣?』朝日新聞社, 2002年
- 吉村浩一編 『特殊事例がひらく心の世界』ナカニシヤ出版, 1996年
- 「少年は見た物を写真のように記憶できた…」朝日新聞1997年10月17日朝刊
- 「教育用玩具やDVDは本当に効果があるのか」『Courrier Japon』2(20), 46-48頁, 2006年
- 「過熱する『早期教育』の行き過ぎた実態」『テーマス』17(3), 66-67頁, 2008年
- 「特集 脳科学の現在 発展する脳科学研究とその課題 〈座談会〉」『三田評論』1125, 10-25頁, 2009年
- 「脳研究の『神話』独り歩きに警鐘 日本神経科学学会」朝日新聞2010年1月8日20:15配信
- 「右脳・左脳、ゲーム脳…脳科学の『神話』ご注意」読売新聞2010年1月23日17:38配信

#### Web ページ

菊池誠の物理ページ内 Weblog 「七田式幼児教育は、やっぱりまずいので」

<http://www.cp.cmc.osaka-u.ac.jp/~kikuchi/weblog/index.php?UID=1183478389>

七田チャイルドアカデミー <http://www.shichida.ne.jp/index.html>

独立行政法人 科学技術振興機構 <http://www.jst.go.jp/>

日本神経科学学会 <http://www.jnss.org/index.html>